みなと・新橋

今・むかし新聞

第９号

令和２年３月

『語り継ぐということ』

私達は過去の出来事や生活の様子を、歴史の教科書や小説などで知ることができます。しかし、その時代に実際に人々はどのように感じ、どのように生きていたのか？直接聞かなければわからない部分がたくさんあります。戦争という、つらく厳しい体験をされた方々と、新たに加わっていただいた若いメンバーを含め、「語り部」の皆さんにそれぞれの青春時代について語っていただきました。

「戦後の桜田」

池田　林太郎

私が疎開先から戻ったのは四年生の三学期でした。町にはアメリカの進駐軍が闊歩して、まだ新橋駅の周辺は闇市の名残が色濃く、粗末なバラック建の商店や居酒屋がひしめき、道端では戦災孤児達が靴磨きをしていました。

國民学校から小学校に改称した「桜田」は焼け残り、ひときわ高く建っていました。

官庁が近く東京都の実験学校に指定されたことにより授業内容は社会科中心となり、自由に生徒が行動することが重んじられました。そのため私達は社会見学を頻繁にするようになり、新聞社、放送局、銀行等を訪問しました。そして発表会を開くと共に学級新聞部、放送部等のチームを作りました。

そのためか、口達者になり営業向きに育てられた一方で、全国から参観人が日増しに多くなり担任の先生はその応対に忙しくて基礎単科の算数、国語、習字がおろそかになり、後々困ることが生じました。

また、戦時中は敵性語として禁じられていた英語はフリーとなり、先生がアメリカ人から指導を受けていたのには、天地がひっくり返ったように驚きました。

そして、チョコレート、チューインガム、コカコーラが身近になり、映画を通じてアメリカは敵国から憧れの国へと変化しました。

それでも、男女共学の友達と自由に楽しく過ごした、戦後の桜田時代は良き思い出です。

「わが青春の新一ホープ」

細矢　隆久

日本に平和が訪れて、春に桜が咲き出す様に一斉にスポーツ界も活気づき、私の大好きな野球が、高校、大学、社会人、プロ野球と、どこの球場も満員の盛況ぶりでした。

私が育ち、通学した新橋駅近くの桜田小学校は校庭が狭く、とても野球などは出来なかったので近くの日比谷公園、その先の皇居前広場で試合をしていました。

日比谷公園には米軍の作った、ソフトボールの球場が二面あり、小音楽堂の前にはスタンドのある観客席と、なんとナイター照明までついている立派なものでした。もう一面は日比谷公会堂の前にあり金網のフェンスがあるだけのグラウンドでしたので米軍が使わない時は私たちも使うことが出来ました。

皇居前広場では祝田橋の内側のコンクリート道路を区切り、事務所で毎月抽選をし、毎週日曜日に試合が出来ましたが、何しろ投手、捕手、内野手はコンクリート道路の上、ライト、センターは松林の中、レフトも道路の上で抜かれればホームランという状態でしたが、それでも野球が出来る喜びで、日曜日が来るのが待ち遠しかったです。ただ、試合をするのが道路の上なので軟式ボール、ゴム底の運動靴の消耗が激しく、親は困ったと思います。

そのうち港区で少年野球大会がはじまる事となり私達のチームも参加が決定し、近くの旅館の御主人がスポンサーになって下さってユニフォームも出来、チーム名も新橋一丁目なので「新一ホープ」となり、芝公園のグラウンドでの大会に出場したのです。

pixta.jp - 20646659

現在の新橋界隈では想像も出来ない様な毎日でした。私の青春の一ページです。

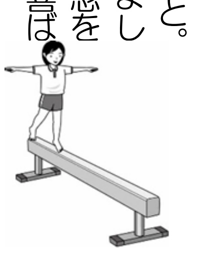
現在八十三歳になった私ですが、相変わらず大好きな高校野球、プロ野球（巨人軍）のファンを続けていて、時々は球場にも足を運んでいます。

「忘れられないこと」

中島　房子　八十三才

（一）明治四十四年生まれの母は、桜田尋常小学校の卒業生です。桜田小学校百周年の頃、小学校に通っていた話を孫達にしてくれました。桜田尋常小学校は、現在の場所ではなく、現在、第一ホテルの場所にあったそうです。玄関を入ると土間に大きな囲炉裏のようなところにお湯がいつも沸いていたそうです。

石板をもって、着物、羽織、袴で通っていたそうで、体操の授業で袴をまくり、平均台をしたことが忘れられない楽しい時間だったと。お友達に歯科医院の長井先生（校医）の奥様と同級生だったこと。日比谷公会堂で、作文を読んだこと。母が懐かしそうに話しておりました。三代揃っての桜田百周年記念を祝えました事は我が家にとって喜ばしい年でした。



（二）昭和十一年生まれの私は、戦後の混乱の中、小学校、新制中学校生活を過ごしました。当時の学校は、どこでも敗戦による社会の混乱と極度の物不足、学校施設設備は何もなく、自前の校舎がなく戦災で焼け残った小学校、高等学校に間借りをして授業が行われました。現在、学校訪問をするたびに、戦争の影響の大きさを感じています。昭和二十年八月十五日は、私達戦争を体験した者の歴史的出来事で忘れられない一日です。

「幼少記の記憶のかけら」

高橋　雅雄

芝区白金三光町三〇七番地、北里研究所の正門（現在よりやや恵比寿より）から見て若干左手にあたる、つまり、聖心女子学院裏門へ通じる蜀江坂の始点に私の生家があった。父、祖父とも植木屋、屋号は、植春。今の渋谷田町間の都バス通りは昔のまま。夏の夕方が子供達の出番となる。ギンヤンマ、キンヤンマ、オニヤンマの大型トンボが次から次へ、何故か道路沿いに直線的低空飛行。それを待ち構えてトリモチをつけたもち竿でからめ獲る。その快感は今も残っている。祖父がコンクリートで造ってくれた２㎡ほどのひょうたん池に、金魚、おたまじゃくし、かめを飼ったり、浅い木箱に自然風景を再現した箱庭造りにも無心に興じた。私が後に造園の道に迷わずに入れたことに少なからず影響したと思われる。また、柿、梅、イチジク等植木もあって、その中のユスラウメの実を洗わずにほおばったためか重症の赤痢となり、両親に深い心配をかけた。また三越湯（現存）で父の背中を亀の子たわしで洗うのが日課だったこと、風呂帰りの夜道で湯上りの手拭いが、家へ帰るまでに氷りついてしまったこともしばしばだった。そんな朝、炭俵での焚火で焼いたさつまいもが、格別の味で何よりの御馳走だった。

その頃、蜀江坂の上には、草地が広がる絶好の子供の遊び場が広がり、眼下には母校となる神応小学校や北里研究所のシンボルの尖塔が見え、子供達はサクラ山とかタヌキ山と呼んでトンボとりや落し穴づくりなど日暮まで遊んだことがなつかしい。その場所が後に自分の居住地となったのも奇縁だが、太平洋戦時の昭和二十年三月十日の東京大空襲では、母校神応小学校が焼け落ちる光景を見ながら、焼夷弾を被弾した我家を守ろうと、地面を這い続ける炎を夢中で消し廻ったことは私の青春奮闘記である。そんな努力も空しく家は、全焼、焼け跡で唯一見つけた遠足土産である、鎌倉の長谷の大佛が、今も我が家の佛壇に鎮座している。

「池田晶子さんという人がいた」

神代　忠男

“居た”と云うのは、彼女は平成十九年にまだ若い四十七才の十命を失った。彼女は慶應義塾大学の哲学科卒の若き哲学者。

私は、彼女の数冊の著作に接し、私の永年の疑問に何か指針を得た気がした。と云うのは昔、私が若い時、人生の不思議に出会って悩んだ。それは一言で云うと『私が私である事』の不思議即ち「私」なる肉体に「私」なる精神を以て生まれ育っている事の不思議。又「日本人」を選んで生まれた訳でもない。「神代家」を選んで生まれて来た訳でもない。それなのに「日本人」の「神代家」の人間として育っている事の不思議。ところが後年池田晶子さんの著書に接して、世の中には私と同じ様なことを考えている人があったと心が躍った。私の心の奥にはまだ少年の疑問が巣食っていたのだろう。

彼女は言う。『私とは何か、私にはそれが不思議でたまらない。この問いの意味、ほとんどの人は通じない。世の人、口を揃えて、「私とは何か」と問うているにも拘わらず。』

そろそろ死が近づいて来た私は「死とはどう云うものか」と考える。「私」に生まれて来たかが不思議なこの「私」が百年近い生涯を終える訳である。彼女は「死」について『死こそが人間にとって最高の謎であり、従ってまた魅惑なのだ。この人生の最大のイベント、これの前には生き人が為のあれこれなどが如何に色褪せて見えることか。死を恐れて避け様とし、生きんが為のあれこれ

の為に生きんとしている人は、死を考えつつ生きるという人生最高の美味を逃していると言ってもいい！』

私は彼女が生きている時に一度でもお会いしたかったと折に想う。でも、もう間もなくあの世でお会いできるかも。

あ!! あの世なんてなかったんだ!!（これも彼女と私が同じ考え）

参考　池田晶子著
「人生は愉快だ」（毎日新聞社版）
「考える日々」（毎日新聞社版）

「私の故郷港区」

高橋　邦子

昭和四年、祖父が定年まで勤め上げた造兵廠の退職金を資本に、芝浦三丁目で、港屋という屋号で遊船業を開業、運河の河岸の台船には、ボート、和船、モーター付き釣り船がつながれ、海水も綺麗で、はぜ釣り客で賑わっていたそうです。

昭和十三年に私が生まれ、芝浦国民学校へ入学する頃は空襲が激しくなり、父はフィリピンへ出征、私達兄弟妹は、母と共に栃木県の親戚を頼って疎開しました。

昭和二十年五月二十五日の空襲で、家も船も焼失、終戦後、親戚の世話で焼跡にバラックを建て芝浦へ戻りました。間もなく父もフィリピンから復員、日雇いの仕事をして食糧難のさなか私達を育ててくれました。姉は女学校を中退しウェイトレスをして働き、兄は中学校を卒業しないうちから近所の海苔加工漁業店で、機械で海苔を細かくして、すだれに乗せて、天日干しをする作業を手伝い、母も働きました。私は芝浜中学卒業後、近所の沖電気で電話器のダイヤル組立の作業をし、夜間は三田高校へ通学しました。

やがて成人式、当時港区役所の旧庁舎にある芝公会堂で西崎流の舞踊で祝っていただきました。やがて平成に入って母が倒れ、自宅で四年半の介護生活の末、亡くなり、港区伊皿子の薬王寺の墓地へ埋葬、墓参が年中行事となりました。

悲しみを癒してくださったのは、生涯学習センター、いろいろな講義に参加し、当時、語り部を立ち上げた広畑先生や所長の清田さん、又仲間と戦争の悲惨さや平和の尊さを語り合い、今日まで語り部を続けて下さった港区に感謝しています。平和都市宣言を掲げる港区、芝公園の、あの平和の灯が、いつまでもともされ、次世代を担う平和青年団の活躍を祈ります。

「新橋生まれ・育ちの我が青春の一ページ」

山口　和良

自分が育った新橋は、戦後の復興がほかの処に比べ早かった。駅前の焼け跡にはヤミ市が広がっていて、雑炊、蒸し芋、衣料を売る店がありましたが、店といっても露店の店、色々な物を求めて人が集まって来ていました。

或る日、母親がヤミ市で学習院の小学生用の制服の古着を買ってきてくれました。上着は衿と身頃の縁に蛇腹の黒テープに赤のパイピングが挟み込まれた独特のもので、裏地は紺地のベルベット、それなりの皇族又は華族の方が手放したものの様で、上着を学校に着て行った処、先生が冗談半分に山口殿下と云ったことから、級友から殿下、殿下とからかわれていやな思いをしました。

そして中学校へと、この頃にはなんとなく家業のそば屋を継ぐと云う思いになって来ました。当時家の近くに黒塀の料亭、待合が一角を成す処があり、夜になると三味線の音や太鼓の響きと戯れの賑わいの別世界があった。我家は祖父親と二代続くそば屋で、家族中心で商うので、忙しさから子供達の面倒が見られない事が多かったので、身の回りの下着や普段着は自分で買っていました。

その日も銀座のデパートに買い物に出かけた処、よく店に来てくれていた二人連れの若い芸者さんに、ばったり。買い物ですかと聞かれたので、そおですとの返事に私達もよと、足袋や履物など買って帰る途中で甘味処に行くので一緒にとの誘いに応じ、あんみつを食べ、おしゃべりに付き合い帰りは並木通りを通って帰って来ましたが日中芸者と歩く学生服の男の子、なんとなく周りの人の目を気にしながら帰って来た当時の思いが、日々が経って銀座に行くと、何となく当時の事が蘇って来ます。

「アキレス腱」

武　恒雄

労務作業員として、ほぼ五十年、無事に過ごし定年退職した。その間、何か記憶に残るような儲け話、大失敗談などはないが、一回だけ、アキレス腱を就業中の事故でプッツリ断裂、三ケ月治療に専念、働かずに給料を貰ったことがある。

担ぎ込まれたのは、浜離宮横を通る浜通りにあった東陽病院（現在は存在していない。）

入院部屋は全科同室、外科の私の隣のベッドはオシャベリ好きな若い船員君、その先には夜中かまわず騒々しい老人だったり、退屈しない面白い経験をした。

一ケ月過ぎて転院が許され、自宅に近い施療院でのリハビリ中心の手当てが始まったが、松葉杖をついての行き帰り、焦れったいけど面白がってもいた。

完治の許しをうけ、仕事に復帰したのは三カ月後、走ることは出来ないが、歩くのに不自由なし。但しリハビリは継続をとの指示は受けたが、すぐに面倒がって中途半端で放り出してしまっていた。

現在、左足を引きずるのは後遺症。グチは言うまい。

「二〇〇〇年から続く友情」

竹地　由佳

二十年前の二〇〇〇年、高校生になりました。現在ブームのタピオカに代わり、私の青春時代ドリンクといえばスターバックスのフラペチーノでした。学校帰り、友達とフラペチーノを飲みながらおしゃべりして、プリクラ（自分の顔や姿をカメラで撮影して、シールに印刷された写真を得る・１回３００円）を撮って友達と共有し、小さな写真アルバムのようなプリクラ帳に貼って集めていました。プリクラの写真は時間とともに色褪せてきましたが、実家においてあるプリクラ帳を眺めると、青春だったなぁとしみじみ感じます。二〇〇一年、私が高校二年生のときに宮城国体が行われました。当時仙台市内に住んでおり、国体の開会式で踊る市民ダンサーの募集案内が学校でありました。ダンス経験不問で、校内から私を含めた二十名ほどが有志で集まり、定期的に国体主催者の指導のもとで本番の半年ほど前から練習が始まりました。学校での自主練習はもちろん、月一回は本会場での全体練習もあり、振り付けを覚えることに一生懸命でした。

国体当日は天皇陛下もご覧になって、県内から集まった約千名の市民ダンサーが一堂に会し、宮城の特産の一つである米の命（田植えから収穫まで）をダンスで表現しました。

さて、みなさんは米についてどのような思いがありますか？私は、農家だった祖父母との田園風景・いつでもどこでもお腹いっぱい食べられる・国体で白い衣装をまとって踊ったことなど良い思い出ばかり溢れてきます。でも、この語り部の会に参加して、それは決して当たり前でなく、どんなに恵まれていることかと思い知らされました。戦時下では白い米はとても贅沢で、ほとんど食べられません。当時どんなに食べるものに困っていたか、さらに、食べ盛りの頃に栄養失調になった話などを聞くたびに、今の暮らしを見つめ直すようになっています。

私の高校時代のセレモニーダンスを機に絆がいっそう強まった友人達とは、今や励まし合いながら子育てをしています。語り部の会でのお話を、次は自分の子ども達にも伝えていきたいと強く思っております。

「今朝は、電車動いているかな」

井上　繁

戦時中、強制疎開で家は壊されたので家族全員が地方へ疎開し、空っぽだった近くの他人の家に父と私は勝手に入って暮らしていました。

その家は幸い焼かれずに済んだのでしたが、戦争が終わるとすぐに持ち主が帰ってきて、当然のことながら追い出され、郊外の伯父の家へと引っ越し三年程居候。

当時中学生だった私は、すぐ近くを走る私鉄に先ず乗り、国電、地下鉄と乗り継いで通学していました。その頃は電気事情が悪く停電は日常茶飯事。国電や地下鉄ではそのようなことは無かったのですが、私が利用した私鉄は停電のため運行休止のときがよくありました。

朝、目が覚めると家の窓を開ける、電車の走る音を聞くためです。音が聞こえないと国電の駅まで約４キロ、歩くほかないので、１時間早く家を出ました。戦争終了直後は万事がそんな調子でしたから、別に苦労だと思ったことはありませんでした。

ばるーんの『語り部』ってなあに？

平成十三年「生涯学習ボランティア講座」事業として、生涯学習センター内桜田小学校記念室に、新橋界隈を中心とした区民の方々が集まり「昔の港区」の学習会を行っています。

平成十五年度からは、また小学校の学習支援活動として、語り部のメンバーが小学校に出向き、子どもたちにいろいろな昔の話をしています。

さらに平成二十八年からは、港区平和青年団の事前研修の一環として、高校生の皆さんとの交流会を行い、少しでも戦争の悲惨さ、平和の大切さを伝えるべく活動しています。

地域の歴史や暮らし、また戦争の貴重な体験など、過去を風化させずに未来へ語り継ぐことが大切であると考えているからです。

ぜひ、興味のある方は、ばるーん「語り部」担当までご連絡ください。

発行・問合せ
住所　〒一〇五-〇〇〇四　東京都港区新橋三-十六-三
電話　03-3431-1606　FAX　03-3431-1619
公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団
港区立生涯学習センター（ばるーん）